

＜書 評＞

砂原茂一 著（国立療養所東京病院）

医者と患者と病院と

今田 拓（宮城県拓杏園）

リハビリテーション関係者にとっては馴染みのある砂原茂一氏（国立療養所東京病院名誉院長）が、岩波新書としては3冊目の本を上梓された。国際障害者年へ向けて第2冊目の「リハビリテーション」が出版されたのが1980年であるから、あれから3年もたたない間に新しい発想をまとめられたその活力に、まず敬意を捧げなくてはならないだろう。

高齢化社会と急増する医療需要の現実と直面し、改めて医療とは何かを考えて行こうとする幾つかのパターンがある。この書は純粋な医の立場から問題を分析し、解決点を見出そうとする一貫した流れを形成し、専門の立場からも思わず共鳴せずにはいられない新しい発想が随所に見られる。

医者の権威について、知的権威、道徳的権威、カリスマ的権威が、70、20、10の分布率で形成されたパーソナリティーが、適正比率である

とする筆者の視点は、結果的に前述の共鳴を呼びおこすことになるのかも知れない。それは批評する私が筆者と同じ医師というプロフェッションであるためであろうが、いうまでもなく新書は一般大衆向けのものであり、さまざまな階層におけるこの書の受けとられ方も、またさまざまであるに違いない。いやむしろこの書は実はそのような反応を期待しながら書かれている。

“ある「医者嫌い」の言い分”と題するプロローグにはじまり、病氣、医者、患者、現代医学、医師への期待、患者の権利、病院という各章が展開された後「時に癒し」というエピローグで結ばれるまで、科学的、社会学的、倫理学的、哲学的に医療への視点を解説しているが、その背景に氏の豊富な医学史観、長年の臨床医としての経験が綾をなして、楽しく読者をひきつけてくれる。病院の役割について“「病気を

治す」のと同じ意味で、入院して「死を治そう」とすることが果して正当かどうか”というようなフレーズは、一般の読者に対する挑発であり、“医療専門家の側に問題を投げ返そうと企らんだ”企図が伺われる。

かといってこの書は医療関係者向きでないというものではなく、まさに現代医学概論そのものとして専門家が座右に置いてよい本なのである。筆者は“医学専門家への問題提起と一般市民への啓蒙という二股かけた企てが結局アブハチとらずに終わったのではないかと恐れています”とある謙虚さの表明を行っているが、いまの情報化社会においては、実はこの逆も日常の茶飯事となっており、それほど気にする必要はないだろう。

病院内で閉鎖的に行われて来た医療は、いま新しい地域保健医療としてシステム化されようとしている。医療は医学の社会的適応であり、あらゆる社会構造の中で医療への関心が高まる必要がある。その指標のための重要な資料としてこの書の意義は非常に大きいと思われる。

（岩波新書、頁228、¥430、1983、岩波書店刊）